

F S C 森林認証永久調査区モニタリング調査（林床植生）

第 17 回報告書

2024 年 9 月 住田町役場林政課

1. 調査の目的

住田町では F S C 森林認証実施に当たり、森林施業等が環境に及ぼす影響について、継続的に観察、点検を行い、よりよい森林経営のための基本資料とすべく実施するモニタリング調査を条件としている。本調査はこれらのモニタリング調査のうち、林床植生の推移を確認するための調査である。

2. 調査概要

住田町内の 4 カ所を永久調査区（大洞、箱根、朴木峠、下大股）に設定し、その永久調査区内に設置された林床植生調査区（1m×1m：以下、コドラートと呼ぶ）において、木本類のうち毎木調査で調査対象としなかったもの及び草本類を対象として、年に一度定点の植生調査を行う。永久調査区は 4 カ所いずれも広葉樹二次林である。

なお、当該永久調査区では平成 18 年に毎木調査が行われている（平成 18 年報告書参照）。

3. 調査方法

(1) コドラートの設置

4 カ所の永久調査区において、①大洞 25.0m×22.0m、②箱根 15.0m×16.5m、③朴木峠 20.0m×12.0m、④下大股 20.0m×16.5m の大きさのプロットを設置。さらに各プロットを「田の字」状に 4 分割し、斜面上に向かって左上を A 区、右上を B 区、左下を C 区、右下を D 区として、A～D 区それぞれの区内に 1 つずつ、計 4 つのコドラートを設置した。コドラートの 4 隅には 1m の鉄杭（先端を赤ペンキで塗装）を打ちこみ、ピンクテープにより周囲を囲んでいる（図 1）。

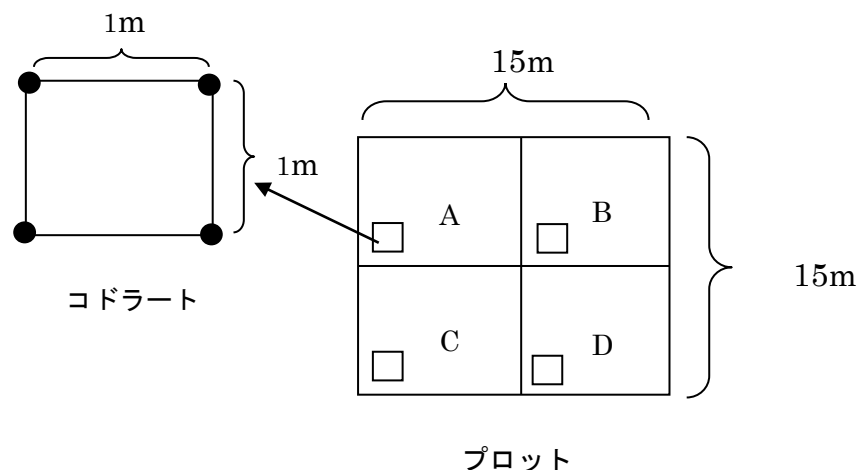


図 1 林床植生調査区（コドラート）と永久調査区（プロット）

なお、箱根において、2014年8月1日に追加したE, F, G, Hの4つのコドラートについては、2015年1月以降撤去し調査を行っていないことから、今回も調査対象としない(E, F, G, Hの4つのコドラートは周囲に電気柵を設置してニホンジカの侵入を防いだ状況をモニタリングすべく、既存のA~Dの斜面上部に設置していたものの、自動撮影カメラによりニホンジカが電気柵の中にも入っていることを確認したため、以後調査しないこととなった)。

以下の表1に、各調査区の概要を示す。

表1 調査区の概要

調査区名	(ア) 大洞	(イ) 箱根	(ウ) 朴木峠	(エ) 下大股
地表の表層の様子	岩が露出し、非常に崩れやすい。	岩が露出し、崩れやすい。	褐色森林土	岩が露出し、崩れやすい。
林床の様子	植生がほぼない。	草本類がやや見られる。ササはない。	草本類がやや見られる。ササはない。	草本類がやや見られる。ササはない。
傾斜	急	中	中～急	緩
斜面の向き	東	南	東	南
明るさ	かなり暗い	暗い	明るい	明るい
周囲の様子	広葉樹二次林	広葉樹二次林	ナラ二次林	広葉樹二次林

(2) 調査時期

本調査は基本的に植生被度が最大となる夏期(6月～9月)に調査を行うこととしている。ただし諸事情により植生被度が最大ではない春先や秋に調査を行った年もある。過去の調査日は以下の表2のとおり。

表2 調査日(下線部は植生被度が最大ではない可能性が高い調査日)

回	調査年	調査日
1	2007(平成19)	8月22～24日
2	2008(平成20)	<u>5月10～11日</u>
3	2009(平成21)	<u>5月7日</u>
4	2010(平成22)	6月26～27日
5	2011(平成23)	<u>10月5日</u>
6	2012(平成24)	<u>4月28日</u>
7	2013(平成25)	6月29日、7月19日
8	2014(平成26)	6月23日
9	2015(平成27)	7月30～31日
10	2016(平成28)	8月25日、26日、29日、9月6日、7日、20日

11	2017（平成29）	9月26日、10月4日
12	2018（平成30）	7月5日、8月23日
13	2019（平成31）	7月8日
14	2020（令和2）	7月13日
15	2021（令和3）	8月18日、24日
16	2023（令和5）	8月24日、9月20日、9月26日
17	2024（令和6）	9月4日、9月5日

4. 調査項目

(1) 植物体の種数及び本数

植物体の本数を記録した。

(2) 植生高

植生高（種ごとの平均高）を記録した。ニホンジカの食害被害が顕著になっていることを踏まえ、2016年から継続して調査対象としている。

(3) 被度

コドラート内に出現した植物全体の被度について記録した。これは2016年から継続して調査対象としている。

なお、2015年までは、コドラート内に出現した全ての草本及び木本実生の種毎の被度（コドラート全体を100とした時にある種が占める割合）を記録していた[※]が、2016年以降は種毎の被度の記録は行っていない。

※ 種毎の被度は、2007～2009年までは階級付けて記録（Ⅳ：100～75%、Ⅲ：75～50%、Ⅱ：50～25%、Ⅰ：25～5%、Ⅰ'：5%～1%、+：1%以下）。2010年以降は被度をパーセント単位でそのまま記録

5. 第17回調査の詳細情報

調査実施日：2024年9月4日、9月5日

調査地：住田町内の永久調査区4カ所（大洞、箱根、朴木峠、下大股）

調査者：石橋 颯己、金 大成（住田町役場林政課）

別紙「第17回林床植生調査結果詳細」に詳細な調査結果データを記録した。

6. 調査結果概要

① 大洞



第1回調査時（2007年8月22日）



第17回調査（2024年9月4日）

(1) 調査区の地形的特徴

傾斜が急で石が積み重なっており、表層は非常に崩れやすい。東向きの斜面だが、林内は全体的にかなり暗く、日中でも林床に光は当たらない。

(2) 調査結果の推移

種数は2007年の調査開始当初から5~10種程度と少ない。その中でも、2007年当初は木本類の更新が見られるコドラートであったが、今回の調査においては木本類は1年生とみられる樹高の低いものが中心で、更新が順調に進んでいないことが推測される。周囲の立木にはケヤキ、アカシデ、トチノキ等が見られるが、実生稚樹は極めて少ない。2014年からスズタケがほとんど葉をつけないほどに枯れ、2015年には立ち枯れた樫がまばらに見られるだけとなった。この原因として、ニホンジカの食害にあっていことが考えられる。2019年から一部プロットで、イラクサといったニホンジカの好まない草本の復活が見られている。2024年の調査では草本類3種、木本類1種という結果になり、植生が完全に失われたコドラートも前年の1か所から2か所に増えた。

被度について、2007年当時から約30%と低かったが、2014年の全体被度は10%以下にまで落ち込んでおり、2024年については5%以下となった。

② 箱根



第1回調査時（2007年8月22日）



第17回調査時（2024年9月4日）

（1）調査区の地形的特徴

傾斜は中程度であり大洞に比較して緩いが、石が積み重なっており表層は崩れやすい。南向きの斜面だが、上層木も充実しており日中でも林床にさほど光は届かない。

（2）調査結果の推移

種数について、草本種がほとんど見られない。木本種についても、周囲にはケヤキ、イタヤカエデ、アカシデ、ウダイカンバ等が見られるが実生稚樹は多くなく、近年は5種程度である。2024年調査では、草本類3種、木本類6種の計9種が見られた。スズタケをはじめとするほとんどの個体でニホンジカによるらしき食害痕が見られ、植生高も概ね10cm以下と低いことから、ニホンジカの被食圧を強く受けているものと思われる。

被度について、2007年の調査開始当初から20%ほどだったのが2014年には5%以下にまで下がり、2024年もこの状況は続いている。

③ 朴木峠



第1回調査時（2007年8月23日）



第17回調査時（2023年9月5日）

（1）調査区の地形的特徴

傾斜は急～中程度。土壌は褐色森林土が主で大洞、箱根に比較して安定している。周囲はミズナラの若い二次林で林内は明るい。

（2）調査結果の推移

種数について、2007年の調査開始当初から、比較的大型の草本から小型の草本まで多様な種に富む状況は変わらない。2016年以降、比較的明るい場所を好む草本類も見られるようになった。一方で、スズタケが斜面向かって右方向から侵入してきた。スズタケの繁茂により、今後、スズタケ以外の植生の豊かさが失われる可能性がある。2024年調査では25種と前年度の19種を上回る種数がみられ、他の調査地と比べても著しく豊かな植生が残存する結果となった。

④ 下大股



第1回調査時（2007年8月23日）



第17回調査時（2024年9月4日）

（1）調査区の地形的特徴

傾斜は4カ所の中で最も緩い。石が積み重なっており崩れやすい。南向きの斜面で、比較的明るい林だが、林床にササは見られない。沢から近い箇所に位置する。

なお、調査地に行くまでの作業道が途中横断する沢の横断工が詰まりやすいことから崩壊しやすい。2013年に崩壊していたのは2018年に改良されたものの、2020年に再び崩壊している。

（2）調査区の植生の推移

種数について、2007年の調査開始当初は③朴木峠に次いで草本の種類が多いサイトであったが、2024年の調査結果では、種数はわずか6種にとどまった。フタリシズカやイラクサ等のニホンジカの嗜好植物が優占している。2009年頃からニホンジカの糞や道、葉への食痕等の痕跡が多く見られるようになっており、ニホンジカの食害にあっていると考えられる。

被度は調査開始以降、顕著に減少しており、調査開始当初に50%以上あった合計被度は、2015年には15%以下に落ち込んでいる。2024年には5%程度の被度となった。種数の減少と同様に、ニホンジカによる食害が被度減少の理由と考えられる。

7. 調査結果の総括

種数について、①大洞、②箱根、④下大股は低迷している。平均植生高についても、どの調査地においても平均高が低下していることが明らかになっている。③朴木峠は20種程度の種数があるが、一方でスズタケも侵入してきており、スズタケによる被圧の影響が懸念される。

被度についても、①大洞と②箱根はもともと③朴木峠や④下大股に比べて低かったが、2010年から2014年にかけてすべての調査区で減少し、それ以降③朴木峠を除いて低い状態が続いている。③朴木峠では2016年以降、スズタケの侵入により回復傾向にあったが、近年は落ち着きを見せている。

種数・植生高・被度のいずれについても、ニホンジカの食害による影響は引き続き大きいと考えられている。比較的狩猟活動の盛んな朴木峠においては、近年は食痕の減少が見取れるが、被度や種数、植生高は依然として低く、まだ狩猟による植生回復と呼ぶには早い状況にある。今後の植生遷移の動向を注視する必要がある。